

共同研究報告 マッカーシズム

1. 研究プロジェクト題名：マッカーシズム

2. 共同研究参加者：平田雅巳、須藤功、田中敬子

3. 共同研究主旨

第二次世界大戦後のアメリカを席卷したマッカーシズムを、政治、経済、文学的見地より検証し、マッカーシズムが猛威をふるった原因やその影響について、現在のアメリカの状況を視野に入れながら考える。ポストモダニズムといわれる現象は、1960年代のいわゆるカウンターカルチャー、ベトナム戦争への介入の頃から本格化した。それに対して、アメリカの1950年代は戦後の資本主義体制が確立した保守的な時代とうたわれているが、対抗文化勃興の下地はできつつあった。マッカーシズムは冷戦時代の反共主義のヒステリーと片づけられがちだが、それが含む問題は多文化主義とナショナリズム、個人と組織、国家体制の対立、文学的言説と政治的言説の関係、メディアの役割など、今日にまで及び、マッカーシズムの意味をふまえることは重要である。このプロジェクトではそれぞれの研究者が、政治、経済、文学の分野から多角的に考察することで、この問題について新たな見方を模索する。

4. 研究活動

当初、共同研究参加者の間で「マッカーシズム」の定義をめぐって意見が交わされた。その後の方針として、それぞれの分野でどのような先行研究があり、現在の検討課題は何かを探ること、そこから各分野間でどのような共同研究を進めることが可能であるか、調査することを第1の目的とし、その後、各研究者の研究発表を行うこととした。2002年9月11日にはアメリカ合衆国で同時多発テロがおこり、その後のアメリカ社会の緊張と不安はマッカーシーの時代の再現のようだ、ともいわれ、図らずもマッカーシズムの検討がより今日的な課題であることを認識させた。この共同研究では、マッカーシズムを狭義に捉えるのではなく、政治的に不人気な少数派に対する弾圧、迫害、強権発動として、1960年代のカウンターカルチャーを準備する冷戦文化を背景に、文化的影響を含めて考察することを確認した。

2002年2月には名古屋アメリカ研究会と合同で、桃山学院大学教授の藤森かよ子氏を招き、「冷戦とアメリカ文学」という題目で、マッカーシズム渦中の反共作家であるアイン・ランドの思想と活動を中心とした講演ののち、討論を行った。この研究会では、亡命ロシア人（ユダヤ系）作家ランドと対照的に、第2次世界大戦前に社会主義者として活動したジョセフィン・コンガー・カネコについて、愛知学院大学院生の大橋秀子氏による研究発表も行われ、フェミニズムの視点から社会主義と反共主義を考察する機会にも恵まれた。

最後に、平田雅己が米国におけるマッカーシズム研究の視角と方法について報告し、研究の現状と今日的な意義について分析をした。また田中敬子は冷戦文化について、当時のアメリカ小説を検証する準備段階として、マッカーシズム渦中のハリウッド映画界と演劇界を対比し、それぞれのジャンルの赤狩りに対する対応を比較した。

5. 共同研究成果

この共同研究は、最近のアメリカの強大化、ブッシュ政権の誕生、単独行動主義をふまえ、アメリカ国内でもはやされる多文化主義と比較する意図があったが、同時多発テロによってアメリカ社会でのマッカーシズムの再現が取りざたされ、この問題を取り上げる重要性は深まった。

マッカーシズム研究は日本ではあまり取り上げられないが、アメリカ合衆国では、新たな政府資料の公開に伴って、また冷戦後の新たな世界から過去を総括するという意識にたって、非常に盛んになっている。共産主義ばかりでなく、人種や性の少数派に対するイデオロギーを絡めた迫害の考察も、多文化主義の立場から進んでいる。しかし冷戦文化研究の中には、冷戦後の現在（といっても同時多発テロ以前）の多文化主義が成熟した中では、マッカーシズムの再現はあり得ない、といった過信がかいま見えるものもある。また、マッカーシーの時代を理解するには1930年代アメリカのニュー・ディール政策とリベラリズムの関係が重要であることもみえてきた。文化と政治の密接な結びつきはニューディール時代に顕著であり、マッカーシー時代の文化検閲は、その記憶に基づいている。多民族多人種国家であるアメリカ合衆国で、国家の安全という名において今も起こりうるマッカーシズムは、ナショナリズムの問題でもある。ポストモダンといわれる現代、広義のマッカーシズムが示す政治と文化の密接な関係の考察は、より重要性を増している。